

当につらいものです。せめて、その苦勞を、少しでも和らげてやりたいのだよ。」

東山さん「お母さんは、もう年を取っておられます。体を冷やすと、風邪を引いたり、お腹をこわしたりする心配があります。こんな苦勞は、やめてください。」

らしさん「わたしは、この仕事を少しもつらいとか、苦勞なことだと思つたことはありません。喜んでしているのですよ。」
その時です。工場の外で、若者達の声がしてきました。

④ 工場に、若者達が次々に入つて来ました。寒さで息が白く見えました。

若者 華山「おはようございます。けさは寒いですね。震えます。」

らしさん「おはよう。寒かつただろう。荷物を置いたら、おわんを持って早くここへ来なさいね。さあ、さあ、早く釜戸の方に来て、手や体を温めなさい。」

若者 華山「ワア、とてもおいしそうですね。おいがしますね。僕ははらぺこです。」

若者 円子「こんなに早くから、おかゆを炊いてくださったのですか。うれしいわ。釜戸の火も、温かくて。ぼかぼかだわ。」

若者 子徳「私もうれしいわ。らしさん、ありがとう。おいしそうなおいのですね。」

らしさん「けさは特別に寒いから、たつぷりとおかゆを炊きましたよ。食べたいただけ、お代わりもできませんよ。遠慮しないでね。」

若者 民栄「うれしいな。寝坊してご飯も食べずに歩いていたら、もう、ふらふらでした。らしさん、お代わりをお願いします。わあ、たくさんのお代わりをありがとう。」



「ありがとうございます。おかげで、元気いっぱい働けます。」
若者達の様子を見ていた東山さんは考え込みました。

東山さん「お母さんは、『早起きをして、おかゆを炊くのは私の楽しみですよ。』と言っておられた。そうか、お母さんは、若者達の嬉しい笑顔を見ながら、自分の子どもを大切にしような気持ちで、やさしく話をされているのか。知らなかつたよ。」

らしさんが、こんなにも若者や社員みんなを喜ばせ、慕われているのを知らずにいた社長の東山さんは、社長としての自分を、はずかしく思いました。

⑤ 若者達は、温かいおかゆをお腹

いっぱい食べて、見違えるほど元気な顔色になりました。みんなでぎやかに話をしています。

若者 華山「僕は朝寝坊したので、お母さんにたたき起こされたんですよ。何も食べずに歩いていたので、途中でふらふらしたんだ。らしさんのおかゆをたくさんいただいたおかげで、元気になるので本当に嬉しい。」



嬉しい。らしさん、ごちそうさまでした。おなかも手も足も、すっかり温まりました。これで仕事にがんばれます。」

若者 円子「らしさん、私も着いた時は、手足が寒さで動かなくなりそうだったけれど、今は、体中がほこほこと温かになりました。これで仕事に集中できます。」

らしさん「みんな嬉しいことを言ってくれるね。でも、無理をしないで、ぼちぼちとやりなさいよ。」
釜戸には、真つ赤な炭火がたくさん残り、工場の中を暖めています。工場全体が、春のような温かさです。

⑥ 工場の中の様子を見ていた東山さんは、考え込みました。

東山さん「お母さんは『早起きをしておかゆを炊くのは、私の楽しみです。』と、言っておられたな。寒くて暗い凍えるような朝なのに、釜戸のたぎぎの用意、お米や麦の準備などを、全部一人でしておられる。これまで一度だって、『大変だ』と言われたことがない。なぜだろう。」



東山さんは、腕組みをし、首をひねって考えました。東山さんは、紡績工場の社長として働いています。だから、工場の糸を作る仕事で、できるだけでなく、たくさんお金もうけができることを考え、いつも工夫してきたからです。

東山さん「お母さんは、若者達のようにそんな笑顔や元気に仕事場で働く姿を見て、喜んでおられたのかな。まるで、自分の子どもを見るような、やさしい目で見ておられたぞ。その上、思いやりのある温かい言葉をかけておられたな。」

⑦ 工場の中では、紡績の仕事が始まり、忙しくなりました。働きに来ている若者達は、みんな張り切つて